

# 研究の成果

3年間の研究により、全国に普及可能な獣害対策のための商品や技術サービスが複数完成した。また、それらの技術を使用した社会実験の結果、捕獲数の向上や被害の軽減などの成果を出した。これらの地域は他地域への導入モデルとなる。

## 研究成果の商品化



ロボットまるみえホカクン



ANIMALmap



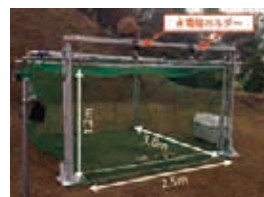
麻醉銃による選択的捕獲技術



エレキブレードポータブル



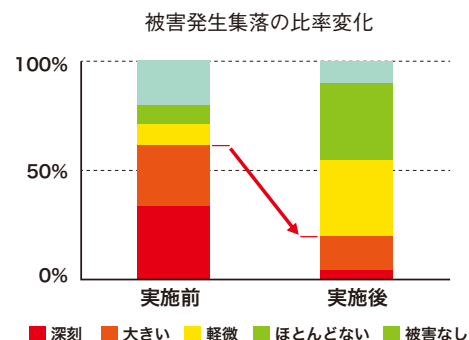
捕獲従事者の感染症予防マニュアル



ネット型大型檻

## 開発された技術の実証による成果

- 捕獲不足地域でのシカ捕獲数向上
- 被害多発地域でのイノシシの群れ捕獲(同時複数捕獲)
- 複数のサル多頭群を被害対策が容易な頭数(40頭程度と想定)に個体数削減
- サルの加害群(加害レベルの低下も含む)をH26当時から半減
- 実践地域での食肉への利活用体制の構築
- 獣害が発生する集落数をH26当時より50%以上低減
- 被害金額をH26当時より50%以上低減



## おわりに

3年間の研究の結果、コンソーシアム参画者により、本成果報告集にまとめた事例をはじめ、数多くの成果が得られました。そして、開発した技術や手法を用いた現地実証では、被害軽減や個体数低下など、他地域でも役立つと考えられる実証結果も得られました。これら技術や手法は、これまでに確立されてきた防護柵や追い払い、捕獲機器等、種々の獣害対策技術体系の一部として、今までの技術に不足した部分を補完することで、使用者の選択肢を増やすことに繋がると考えられます。地域の実情に合わせ、既往技術と組み合わせ導入することで獣害を軽減させ、農林業の維持や発展に寄与することが、研究開発の本来の目標でもあります。そのためには、技術だけでなく導入や運用の方法、対策実践地域へのサポートなど、技術を使用する人の存在も不可欠です。獣害対策は自然科学と社会科学双方の要素が必要な総合技術であり、その技術体系の1つとして、本研究の結果が効果的に使用していただける様、参画機関は今後も普及のためのアウトリーチ活動にも取り組みます。

最後に、本研究の機会をいただいた、農林水産省並びに生研支援センターに深く感謝申し上げます。

ICTによる農林一体獣害対策コンソーシアム参画者一同